



1 依頼を待って、依頼に答えて

阪神・淡路大地震の直後から、「何でもいから体験を話してほしい」という依頼がありました。

5年を過ぎたころから依頼内容が変化し始めた。「体験の中で教訓になることも教えてほしい」と。

10年を迎えたとき「神戸からの発信」ということで多くの人たちが遠方まで教訓を交えた体験を語りに行った。10年と言う節目の中、もう依頼は来ないだろうと思っていました。

しかし、震災体験を語り継ごうという強い心を持ち、語り部活動も経験してきた6人に促され「語り部KOBÉ 1995」を立ち上げました。

—今生きていることを感謝し—

- (1) 生の体験を語ります
- (2) 命の大切さへの眼差し
- (3) 体験の中から生まれる知恵
- (4) 被災地への支援、応援

という思いを掲げて依頼を待つことにした。

2 防災、減災への世論のうねり

マスコミで東海・東南海地震、直下型地震などのニュースが頻繁に報道されるようになり、被災体験を話して欲しいとの依頼が増えてきました。主に地域自治

会、自主防災組織、公民館、社会福祉協議会、高等学校などから、地域・組織のリーダーの方々が防災に取り組みうとし始めたが「周りの皆さんが向き合ってくれない」そこで「被災体験を聞くこと」を契機にして活動を活発にしたい、そういう願いから依頼をいただくことが増えてきました。

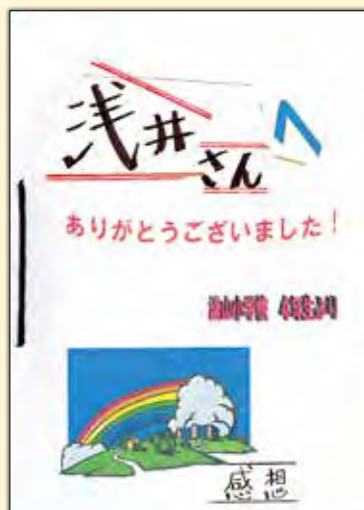
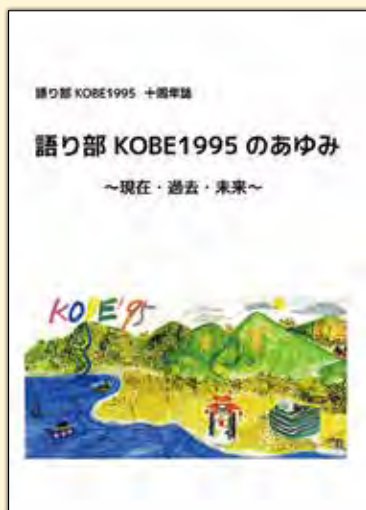
3 掲げた思いに沿って

(1) 命の大切さへの眼差し

- ・「自分の命を粗末にしないように」遺族の方から生徒たちにメッセージを語ってほしいという依頼も数件ありました。
- ・6人の高齢女子のグループに招かれたこともあった。6人で月1回社会問題を話し合っているとのこと、その熱っぽさに感銘を受けました。

(2) 被災地への支援、応援

- ・新潟県中越地震の時は、長岡市、山古志に行き神戸市の小学生からの募金、メッセージを届けた。米を送ってもらい、神戸で販売するという支援活動をしたこともありました。
- ・東日本震災の時は岩手県九戸郡野田村の応援の一環として野田小学校の生徒25人(5、6年生)を8月初旬神戸に招きました。神戸の街並みをバスの中から見て「神戸に本当に大きな地震があったの」と聞かれて戸惑いました。復興した神戸の街並みが野田村の15年後の復活を語りかけたようでした。



卒業式に行った時、「神戸から帰ってきたとき笑顔いっぱい神戸の話をしてくれて、ほっとしました。」と保護者の一言、私たちが笑顔になれました。

4 語り継ぐ・繋ぐ

グループ結成時から、顧問の船木先生のゼミ生と様々なコラボレーションをしてきました。

例えば、

- ① 語り部の話を学生が教材として作り上げる
- ② ゼミ生と私たちが一緒に同じ小学校に行き授業をする

この様に若い人たちと繋がることで活動の幅が広がり、活気も出てきました。

一方、グループは震災から23年たちメンバーも高齢化し2人が退会しました。

3年前から若いメンバーを見つけようと手を尽くしました。そして、若いメンバー4人を迎えることができました。内訳は、小学校2年で被災した男子1人、女子1人、小学校1年生で被災した男子1人、震災当日に誕生した男子1人です。

個人指名の依頼もあり、すでに活動を

始めている。

グループ「語り部KOB E 1 9 9 5」としての「語り継ぎ活動」も暫く継続することができるようになったようです。

5 出会った本気人

本気になって防災を考えてほしいと思いつながりながら語ってきました。

- ① 夏休みに徒歩で帰宅させ、自分の安全帰宅マップを作らせている高等学校
- ② 近くの保育所、幼稚園と定期交流し災害時にペアで学校に避難誘導する中学校3年生の活動
- ③ 廃車工場に行きタイヤ交換のジャッキをもらったり、いらなくなったりヤカーを探したりしてそれを地域の防災倉庫に補充している市役所の係長
- ④ 5食分の私食を机の下、ロッカーに全員が準備している市役所

本気になって防災・減災に取り組む人が多くなってきたようです。

これからも、今生きていることを感謝し生の体験を語り継いでいきます。